



夜のこんな 時間には

5月14日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

5月14日のおはなし「夜のこんな時間には」

夜のこんな時間には、果てしなく一人ぼっちに感じることもある。

キッチンテーブルに広げたIKEAのカタログを前に和子はため息をつく。IKEAのカタログに不満があるのではない。IKEAのカタログの世界が楽しそうで自分がそうでないと思うわけでもない。それどころか和子の家はインテリア雑誌で紹介されたことがあるほどで、そのコーディネートには自信がある。家族は仲良く、経済的にも安定し、仕事も充実しており、かつて夢見たとおりの生活を手に入れている。不満などあるわけがない。

カップの中のインスタントコーヒーはすっかり冷めて味も香りもない。照明は明るく、料理を美味しく見せるという電球の光には温かみがあるし、キッチンにはカラフルな鍋や調理器具が整然と並べられている。にもかかわらず和子はまるで宇宙空間に一人漂うような気分を味わっている。自分だけがぼつりと照らされている他は、深い深い闇に取り囲まれているかのような。見ているだけで魂が吸い取られてしまう深い暗黒。

コーヒーをひと口すすり、かたりとカップをソーサーに置く。かたりという音が一瞬鼓膜を刺激するがそれもすぐさま飲み込まれてしまう。和子のまわりの宇宙の闇に。長男の弁当の下ごしらえも終わり、会社の経理関係の面倒な作業も終わり、家族も寝静まり、後は眠る前の短いひととき、沼田まほかるの新作にはまってもいい、小野リサのCDを一枚聴いてもいい、好きなようにできる、隠れ家のようなお気に入りの時間帯。

なのに時おり、夜のこんな時間には、果てしなく一人ぼっちに感じることもある。和子はテーブルの引き出しを開け、メモ用紙の束を取り出す。手になじんだ古ぼけたシャープペンシルを手にとると落書きをはじめ。三男にせがまれて描いてあげるようなかわいいタッチの絵ではなく、ペン先が走るままに描くのは不条理な絵だ。怒る猫。無限に互いを飲み込み続けるカバとキリン。巨大なキノコの森を歩く裸の少年と少女。

あの劇団は舞台美術が凡庸だな。とりとめもなく和子は考える。脚本は手直しすればまだ何とかなる。でもどんなに脚本の完成度が上がっても、役者のアンサンブルが高まっても、あの凡庸な舞台美術では世界そのものがぶちこわしだな。和子が運営する小さな劇場は使用料の安さから若手の劇団に人気が高く、一年中ほぼ途切れることなく稽古と本番が繰り返されている。

小屋主の特権で、和子はしばしば通し稽古の片隅に身を置く。劇場のブログに公演の見どころをまとめるためと称して。通し稽古の後、意見や感想を求められてもダメ出しなどには一切参加しないが、和子の劇場を使う大抵の劇団の大抵の若い演出家たちよりもはるかに見る目はある。和子が高く評価するポイントは観客にも伝わるし、和子が見つけ出す問題点は最後までその公演

を呪い続けることになる。

真っ黒な雨が降り注ぐ超高層ビル街を、大きなナメクジ型の知的生命体が行列をなして進んでいく情景を描き上げて、不意に空腹を感じて和子は羊羹を食べることにする。いただきものの羊羹は夕食後に4人で切った切り口が乾燥して少し硬くなっている。この硬くなり始めた切り口を和子は嫌いではない。薄く薄く1センチもないくらいに薄く切って、しゃりとした歯ざわりの、切り口近くの羊羹を味わう。その食感を楽しむため少しずつ、少しずつかじってゆっくり味わう。

孤独と羊羹。

ふとその言葉が頭に浮かび、メドベーヴィチとアリョーシンという愉快的詐欺師の二人組が頭に浮かび、夜ごとインターネットで配信される詩の朗読会を舞台に、パリ警察の敏腕警部と十二人の美しい盲目の娼婦たちと伝説の幫間（たいこもち）が登場するスラップスティックコメディが頭に浮かび、その瞬間、和子は猛然と新作公演『孤独と羊羹』の戯曲を書き始める。二十五年ぶりの新作だ。上演方法は……まあいい。そんなことより書かなくちゃ。

メドベーヴィチ「夜のこんな時間には、果てしなく一人ぼっちに感じることもある」

アリョーシン「奇遇だね。おれもだよ。そうだ。一人ぼっち倶楽部ってのを作って世界中の一人ぼっちで連帯しないか」

メドベーヴィチ「いいねえ。羊羹の角で人が殺せるか試してもいい？」

（「孤独と羊羹」 ordered by atohchie-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

新作スタート。お題募集中。

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は
「[SFPインデックス \(ただいま作成中\)](#)」
をご活用ください。

夜のこんな時間には

<http://p.booklog.jp/book/35808>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35808>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35808>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.